Under the Different Sky : semi-doctrine

田中カナタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｕｎｄｅｒ　ｔｈｅ　Ｄｉｆｆｅｒｅｎｔ　Ｓｋｙ：　ｓｅｍｉ－ｄｏｃｔｒｉｎｅ

【Ｎコード】
Ｎ７６７６Ｃ

【作者名】
田中カナタ

【あらすじ】
全てがもつのは不可逆の恣意性。信じていても現象していないものがあるし、信じていなくても現象しているものもある。要するに、世界の中心には貴方がいない、という事です。ゆめゆめお忘れのなきよう。

1. 普遍包絡環にみられる随伴表現

本を読み終えて、閉じる。
この一瞬は———他の何物にも代え難い。
ため息を挟んで、目蓋も閉じた。
（……）
混沌とする思考、感情、意識。それら全てが複雑系の因子と化し、非連続なスペクトルを配列する。秩序は塵々になって分解された。自我の境界条件は曖昧に。常軌なんてものは逸脱されて既に久しい。

キャパシティを超えた量の情報が脳の中を蹂躙していく感覚に、ぼくは吐き気を覚えた。
自在がぶれている。これは、「彼」と「ぼく」との同期、そして解離が連続試行された結果だ。「彼」への介入は、まずは天からの視点を持つことから始まる。これが「ぼく」だ。その視点が、次第に「彼」のそれへとリンクしていく。伴うのは違和感。ぼくは「彼」と同調しようと努力する。ここのフェイズを超えれば、後は流れに思考を任せるだけで良い。そのためにも、ぼくはページをめくり続ける。また、「彼」と同調するのも重要だが、次に意識すべきは、「彼」を取り巻く環境への理解である。ページが進む度に構築されていく世界。「彼」が視覚する、若しくは認識する世界を、ぼくは「ぼく」に対して最適化していくのだ。「彼」が憎むもの。愛でるもの。あるいは、無視するもの。「彼」の白眼青眼に映る総てを清濁併せ呑む。
その行為の末に、今のぼくがある。
「彼」の喜びはぼくの愉悦。「彼」の悲しみはぼくの哀傷。「彼」の葛藤にぼくも苦しみ、「彼」の衝動にぼくも突き動かされた。
そして、終(つい)には「彼」の世界の果てに、ぼくは立ったのだ。
違う空の下。

微動する自在がその世界の系に収束したとき、ぼくの視界には一面の青空が広がっていた。この風景を「彼」も見ている。校舎の屋上で、ベンチに寝そべり、星でただ独り在りながら。

世界で生きながらえているものが、自分以外に居ない。その状況下では、きっと「ぼく」は不安になるだろう。そして「ぼく」は終末的な衝動に駆られるだろう。しかし、「彼」はどうだったのだろうか？

その直接的な心象描写は、果たして、本のページを捲りきっても記されてはいなかった。

ここにきて、ようやく自在が「彼」のそれから解離する。遊離したぼくはどこへ行けばよいのか。光はどこへとも差してはおらず、ぼくは不安になる。

仕様がないので更に目を閉じる。深く落ちる。

抜け出せないまどろみの沼に沈みながら。やはり「ぼく」はぼくだけなんだと思いつつ、コンタミネーションされた意識の渦へと呑み込まれていった。

／＊／

「という訳で、これは封印指定物だ」

そんなイタい台詞を呟きながら、先日読み終えた新書本を押入れの奥底にあるダンボールにしまうため、その引き戸を開ける。自己セオリーとして「読了後、自身の思想・行動原理に大きく影響を及ぼす可能性がある書籍は厳重に保管する」というものがある。今回の場合、対多世界敷衍演算処理量子コンピュータの開発に残りの人生をかけてしまいそうになった。三日目で目が覚めたのだが。能力的な意味で。

そんなことはさて置き、がさごそと押入れをあさる。お蔵入りとなっている扇風機とストーブを出し、今まで学校で使用してきた教科書やノートの束をのけ、その他の有象無象を除けて、ようやく目

的のダンボールへと手が至る。ここからは、迅速に事を済まさなければならない。何故ならば、下手に件のダンボールが収める書冊に目を通してしまうと、気がついたときには日が暮れてしまっている恐れがあるからだ。あな恐ろしや、名作の数々。享受と消費で満足できる人間にとっては、数十年の人生なんて娯楽で埋め尽くせてしまう。それが怖いが為の封印である。ぼくは、ぼく自身の立つステージの低さを余裕をもって理解しているつもりだ。まあ、そんな訳で。

「さようなら。いつの日か、お前から受けた感傷が生きるときがきたらいいけどな」

告別の句を述べ、本をダンボールに入れようとする———その時だった。玄関のチャイムがなったのは。

今の時間、この家にはぼく一人しか居ない。当然、応答すべきはその人間だ、ということになる。

「はいはい」

どたばたと階段を降りて、玄関の扉を開く。

数メートル先の門の向こうに見えたのは、ぼくも通う高校の制服姿で畏まりながら立つ眼鏡少女である。顔を伏せ気味にして、口をパクパクさせている。何か言っているようだが、よく声が聞こえない。その彼女の現状況をコミカライズさせると、頭の横に跳ねる汗のようなものが描写されていそうだった。

取り合えず、こちらから会話を切り出してみる。

「どちらさんですか？」

「————っっ！？」

どうやら吃驚したようで、あうあう言いながらオロオロしている。それにしても、擬音語や擬音語に表しやすい行動ばかりする娘である。その彼女の現状況をコミカライズさせると、双眼が渦巻きで描写されていそうだった。

会話のキャッチボールが成立しそうにないので、こちらがイニシアチブを握って接触することにした。

「あの、何か用なら、それを言ってくれないと困るんですけど。見知らぬお姉さん」
「ひえぇぇ」
思わず噴出しそうになる。他ではお目にかかれないリアクションである。その彼女の現状況をコミカライズさせると、その後に続く吹き出しの中身が具体的意味を持たない記号で埋め尽くされていそうだった。
「ところで、あなたはぼくも通う高校の生徒であるようですね。勝手ながら、本日はその関係でウチへやって来られたとお見受けしますが」
「そそその通りなんですけど、ほほほほんとに私のこと見覚えないんですかぁ？」
「全力で肯定します」
「ひどいー」
もはや彼女の目は「く」の字を鏡合わせにしたようになっていた。あの表現でそれらがまるで「目」のように認識できるのだから、いやはや日本人の脳は特殊である。
「その例などを踏まえながら考えて、おそらく異種感覚モダリティ連合の発達に関して言えば、日本人は人類随一ではないだろうか。あなたもそう思うでしょう？」
「ああ、いつの間にやら話があさっての方向にー」
「で、何の用事なんだ、お隣さん家の北根さん」
「そしてもう飽きられたー」
コミュニケーション強制終了。換言すれば、彼女の言うとおりに飽きたということにもなる。
かくして、我が家への来訪者とは、隣りに住む北根家の長女である歌種（うたたね）さんであった。もちろん顔見知りである。イメージとしては、慎ましやかで読書嗜好がある女性、というものがある。あからさまに表現すれば、地味だ、となるだろう。ついでに言わせてもらえれば、実にふざけた名だと思う。名は体を表すというが、彼女の場合、

それは場違いの的を射た言葉だとなるだろう。歌種さんは、立ったまま転寝(うたたね)をし、そこかしこに頭を打ち付ける頻度が異常に高かったりする、この時代に在って天晴れな人間ではあるが、決して周囲に感動の芽を息吹かせる種を蒔くような歌い手であったりすることはない。むしろその歌唱力には、聴衆が無視できないほどの問題が見受けられる。

「いつか……改名できる日が来ると良いよな」

「勝手に憐れに思われてるよぅ。今日五度目だぁ」

本当に憐れである。まあ、周囲にそう感じさせるようなオーラを彼女が放っていることは間違いない。

「改めて聞くけど、用件は何なの？　ぼく、今忙しいんだけど」

言いながら思い出す。そうだった。ぼくはこの本を迅速に封印しなければならないのだった。

……って、本を持って来てしまっているし。

「そそそそうなんだ、ごめんねごめんね———ということは、その忙しい件でこの三日間、学校を休んでいたの？」

水飲み鳥のように頭を下げつつも、無駄に鋭い勘を発揮する歌種さん。

「あ、ああ、そうなんだ。実はさ、ちょっと立て込んでいてさ」

確かに、彼女の言うとおりだとしても事の粗筋は逸れていない。ぼくは、この封印指定本を読んだことによって、量子論やら特殊アルゴリズムやらの文献漁りにこれまでの三日間を捧げていたのだから。

「えぇぇ、だ、大丈夫なの、何か大変なことになったりしてるのっ？」

「それ程大したことじゃなかったよ。殆どもう片が付いたし。後はちょっとした後始末が残っているけど」

言葉を濁す。しかし、嘘は台詞の何処にも混じってはいない。

「そうなんだ……実はね、先生に連絡が取れないから様子を見てきてほしいって言われて、だから私、来たんだ———あ、ももも

ちろん私も心配してたんだよっ」
　ありきたりな世辞を付け加える歌種さん。相変わらず、要らない苦労をしているなぁ。
「ありがとう、歌種さん」
　ぼくもテンプレートな返しをしておく。
　それを真面目に受け取るところは歌種さんの素敵なところである。畏まり俯いた顔の表情は、少し嬉しそうに見えた。
「だから、明日からはちゃんと学校に通えるよ」
　そう言って、会話を切ろうとする。が。
「うん。分かったよ――――あれ？」
　歌種さんは、再び何かに気付いたような疑問符の音をあげる。
　彼女の視線は、ぼくの右手に向かっていた。
　彼女は、認識した視覚情報を自分のフィルターに通し、それによって生成された原始的な感情を伴ったまま、おもむろに口を開いた。

「――――手に持っているの、本？　小説？」

　純粋な欲望に中てられ、背筋に寒いものが走った。
「た、確かに小説、だけれども」
　――――あ、そうか。歌種さんは、
「面白いの？　まだ読んでいる最中？」
「読んだよ。結構……というか、かなり面白かった。ぼくとしては」
「ふぅん」
　巷で語られる本の虫（ビブリオマニア）である。
　学校で図書委員を務める歌種さんは、その真面目そうな外見に似合わず、任務に怠慢な姿勢で臨んでいることで知られている。何故ならば、彼女はその仕事中、恒常的に読書に勤しんでおり、例え学生が本の貸し借りに来ても華麗にスルーを決め込むからである。しかし、最近では図書室に未読の本がなくなってしまい、時々は態度

に改善が見られているらしいのだが。また、界隈の書店では“伝説の少女A”で知られているとか何とか。
そんな彼女の食指がぼくの持つ封印指定本に向いている。つまり、今の展開が彼女によって引っ張られている先には一つの選択肢しかあるまい。先のぼくの言葉で完全に餌付けは為されてしまっている。
門を超えて、徐々にこっちへ近づいてきている歌種さんに圧されるように。
「……これ、貸そうか？」
本を彼女の方に差し出して言う。
「ええっ、いいのっっ？」
歌種さんは、ぼくの右手を両手で掴んだ。というか、本を捕らえた、と表現したほうが適切かもしれない。
「あ、でも、そんな、また読み返しちゃおうかなぁとか評論や二次創作書いちゃおうとか思ったりしてるんじゃ」
してねえよ。
「もう読んだし、奥にしまっちゃおうかと思ってたところだし。持っていってくれても特に問題はないよ。はい、どうぞ」
「本当？　借りて行っちゃってもいいの？　うわー嬉しいなぁ」
渡した本を抱えて満面の笑みを浮かべる歌種さん。今にも踊りだしそうなほどに喜んでいる。
と思っていたら、彼女は実際に一回転してみせた。怖ろしい娘だよ、全く。
まあ、喜んで貰えて何よりである。
「ヨカッタヨカッタ」
最早、片言の形式的な言葉で返すしかなかった。状況にぼくの理解が追いすがっていけないという意味で。
「ありがとうね、帰ったら早速読んじゃうね、明日には返すからね」
矢継ぎ早に一息でそう言うと、歌種さんは門の外に出て行った。
「じゃあ、明日は学校で会おうねーっ」
ばたばたばたがちゃぎぃぃばたん、どたどたどた……

「……」

果たして、歌種さんは自分の家に駆け込んでいった。

「いやはや、相変わらず不安定に自律してるんだなぁ」

ぼやきながら、今ではただ散らかしただけの状況となってしまった、自室の押入れ周りを片付け始める。実質的に無駄な作業時間と成り果ててしまったことがやり切れない。ロールプレイングゲームで言うと、新しく辿り着いた町の周辺でレベル上げとともにお金を貯めて、そこで買える最強の武器を買ったにもかかわらず、次のダンジョンでその武器が手に入ってしまった時の悔しさに似ている……いや、その場合だと後で売り払えばお金にはなるか……ということは、この作業は純真無垢な徒労ということに……。

「儘にならぬが浮世の常、ってか」

だけれども、その格言は今日までの三日間で既に思い知っている筈だ。うーむ。”向上心のないやつは馬鹿だ”の言葉で戒めた方が尤もかもしれない。まあ、ぼくは享受と消費で満足できる側の人間ですから。歌種さんのように二次創作なんて真似は出来ません。ちなみに彼女のペンネームは”星川（ほしかわ）流（ながれ）”というものである。正直な感想を述べさせて貰うと、そのペンネームは、彼女の本名とは別のベクトルで恥ずかしさが振り切れてしまっていると思う。学校などの公衆の場で晒されてしまった日には、彼女への憐れみの視線曝露率が大幅に高まるだろう。あっはっはっはっは。

何と無しに、その光景を見てみたい気もして。

音も無しに、加虐心が鎌首をもたげる。

「――なんちゃって、いかんいかん」

頭を小突いて舌を出す。人前では絶対にしないが。

いや、でも、しかし。

何かが引っ掛かるというか、飲み込めないというか、要するに納得できない。そんな感じで。どうも片付けに集中できない。

まさか、本の一冊貸したからって、見返りに固執するような人間だったのか、ぼくは。

「さ、さすがにそこまでちっぽけじゃないよなぁ、ぼくだって」

言いながらも、根が見当たらない焦燥感に駆られる。

そんな状態のまま、どうにか片付けは終了し、押入れの戸を閉めた。

「……」

まあ、良いか。

明日から何か面白いものが見れそうな気がする。

2.　多項式時間アルゴリズムの最悪計算量　1

校舎の屋上で、ベンチに寝そべり、星でただ独り在りながら。
彼は眠る。
描写によると、狂気はとうに過ぎたらしい。お陰で彼はまだ存在を繋ぎとめている。
それは拷問ではないか、とぼくは思う。
そう思いながら、彼を見下ろす。
穏やかな彼の顔。眠りにつく直前に見られる微細な時間の絵。
ぼくは、手を伸ばしてみた。
触れる――その瞬間。
彼が眼を開く。そしてすぐさまに何かを呟く。
「――――――」
その何かを聞き取れないまま。
世界は再びぼくの意識の波に飲み込まれていった。

／＊／

三日ぶりにやってきた高校には特にぼくが認識を改める必要があるような変化もなく、ただゆったりとその営みを開始しようとしていた。
教壇ではクラス担任の教師が朝のホームルームを始めている。ぼくはそれを横目で確認した後、窓の外の風景をぼんやりと眺める。
校門。ぱらぱらとやってくる、遅刻確定の生徒たち。活気付きだしていく町模様。我関せずと空にたゆたう雲。
――何の変化もない。
ぼくが何の前触れもなく3日間学校を無断欠席しても、遠くで人が死んでも、また、科学のパラダイムシフトがあろうとも、宇宙の幾光年先で超新星爆発が起ころうとも、神の見えざる手が学校とい

う小さな社会にその根本を揺るがすような影響を与えることはない。
別に拗ねている訳ではない。学校を世界の中心に据えてみれば、これらの事例はすべて同次元に並ぶということを再認識したまでだ。
この思考によってぼくは安心を得られる。ぼくがちっぽけな存在であることを、そしてその考え自体が取るに足らない些事であることをぼく自身に言い聞かせてなだめるのだ。
何もない。特別もない。
なるがままになり、あるがままであれ。
それがぼくのルールだ――――
以上、軌道補正完了。
これで、しばらくは平気の平左で学校生活をやっていけるだろう。
今日からもそこそこ親交のある友達とそこそこの日常を過ごしてゆくのだ。この代わり映えのない景色のように。
雲は流れるし、道路には車が走る。校門からは未だに遅刻しまいと駆け込んでくる女生徒もいるし――――あ、こけた。ははは、ドジだなぁ。ほら、早く起き上がらないとホームルームが終わっちゃうぞー。遅刻が確定しちゃうぞー。って、ホームルーム終わったし。残念だけど、間に合わないかもなー。
……。
「……あれ？」
思わず呟く。
校門と校舎の中間当たりでうつ伏せに転んだ女生徒はなかなか起き上がろうとしない。という以前に、身動き一つしない。
更に数分が経ち。一時間目の授業を始めるべく担任とは別の教師がやってくる。その間で校門の周辺一帯を通っていく人間はおらず、地面と全身零距離にある女生徒は今なお放置状態にあった。
流石に、マズイのでは……。
「先生っ」
挙手をして、壇上で授業の準備をしている教師に呼びかける。
「お、おぉ、どうした笹鳴（ささなき）」

どうしたというのか、ぼくは。出したい言葉がなかなか出て来ず
———取り敢えずのテンプレートを選び出す。
「トイレ行ってきていいですか？」
ぼくの発言に女子は苦笑いをし、男子は顔を赤らめていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7676c/

Under the Different Sky : semi-doctrine

2011年1月15日02時26分発行